

2010年4月26日

民主党北海道

代表 三井 辨雄 様

幹事長 佐野 法充 様

北海道脱ダムをめざす会（19団体）

貴職におかれましては、道政と国政の刷新のためにご活躍されていることに敬意を表します。

私たちは、昨年新政権発足以来、コンクリートから人へという考えに基づく前原国土交通大臣のダム事業見直しに双手をあげて賛同し、大いに期待してきました。その後何度か、前原大臣や三日月政務官に対して要望を提出し、三日月政務官と直接、意見交換する場も実現し、感謝しています。

今回は、年度の初めにあたり、あらためて私たちの要望をお聞きしていただきたく、要望書を取りまとめました。凍結見直しの対象となったサンルダムと平取ダムについては、私たちもダムの必要性やダムによらない治水について検証作業を進め、すでに利水問題についての検証結果を前原大臣と有識者会議に届けました。他方、当別ダムについては、昨年末の2010年度予算案提示にあたって、当別ダムの本体着工を理由にして検証対象から外されたことに私たちは強く抗議しました。私たちは、当別ダムに関わる利水問題の検証において、水余りおよび水の活用によってダムによらない利水が十分可能であることを明らかにしました。従って、ダムの見直しは、本体着工ではなく、国民にとって必要かどうかを基準にして判断していただきたいと強く願っております。

このような私たちの声を政府に反映していただきたく、以下に、北海道内三つのダムそれぞれについての要望を取りまとめましたので、ご検討をよろしくお願いいたします。なお、お忙しい中大変恐縮ですが、ご回答は、2010年5月10日までに、北海道自然保護協会（〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目、加森ビル6F、Tel&FAX:011-251-5465）宛に、文書によっていただけますよう、宜しく申し上げます。

1. 当別ダムに関する要望書

要旨

1. 当別ダムを一時凍結するよう政策決定してください。
2. 当別ダムの2010年度補助金配分を凍結するよう国に求めてください。

前原国土交通大臣は、3月26日に2010年度の予算配分を公表しました。補助ダムである当別ダムの国庫補助予算額提示額は、87億3,900万円となっており、内訳は治水が62億6,600万円（国が7割・道が3割負担）で残りが利水です。北海道の要望額は、

88 億円であることから、国は道の要望どおり満額に近い補助金を提示しました。この補助金が執行されるということは、計画からすでに 40 年が経過し利水の面からも治水の面からも、当初の目的を失った当別ダムが一度も検証されることもなく、本体工事が進められ完成するという事です。

新政権が誕生し、一度走り出したら止まらないといわれてきたダム事業の見直しが始まったことを多くの国民は期待し、その政策を支持しました。しかし、国の直轄ダムと補助ダム、本体着工ダムと未着工ダムと線引きし、多額の税金を投入しムダなダムを造るということは、国民の期待を裏切ることになります。

私たち、「当別ダム周辺環境を考える市民連絡会」は、2009 年 12 月 29 日に「当別ダムの一時的凍結及び検証を求める要望書」を前原国土交通大臣と民主党北海道の三井辨雄代表に提出しました。さらに、3 月 26 日、国に赴き「北海道脱ダムをめざす会」17 団体を代表し「北海道における 3 ダム事業（サンルダム・平取ダム・当別ダム）の必要性の検証結果と提言」を前原国土交通大臣と今後の治水のあり方に関する有識者会議に提出しました。この提言書は、三日月政務官に手渡し、今後の有識者会議に反映することを約束していただきました。また、当別ダムに関しては、当別ダムを一時的凍結し、検証対象にして事業を見直すよう要望しました。三日月政務官は、「北海道の川をどう使うのか真剣に考えなければならない。一方、当別ダムは補助ダムであることから道の判断、民主党北海道の考えも尊重することも大事である。」という見解を示しました。

しかし、国が道の判断を尊重するという事は、ダム推進を明確にしている知事の下でダムを造るということです。2008 年 7 月、知事は道民の疑問の声をまったく無視し、当別ダム本体工事の入札に指名停止業者まで参加させて入札を強行し、道政の歴史に汚点を残しました。さらに、国から手厚い補助をもらうため、本体工事を昼夜兼行 300 人体制で突貫工事を進めダム事業費 684 億円のうち 7 割を執行しました。

当別ダムは、事業主体が道となっていますが、実際には旧政権下で国の主導の下に進められてきたものです。補助ダムの進め方は各知事が判断するといってもダムの事業費は、治水では 7 割が国の補助金を支出します。また、3 月 26 日に公表された国土交通省の予算配分は、道からの補助金交付の申請を受けて「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」第 6 条により、「補助金等の交付が法令及び予算で定めるところに違反しないかどうか、補助事業等の目的及び内容が適正であるかどうか、金額の算定に誤りがないかどうか等を調査」した上で、交付の決定をすることになっています。

当別ダムについては、知事は節目、節目で再評価をしていると回答していますが、「ダムありき」を前提とした再評価では真の見直しにはなりません。2009 年 3 月、総務省は厚生労働省に対して政策評価の内容点検の結果、水道水源開発施設整備事業（当別ダム）について、札幌市の給水人口が 2021 年度以降減少していく一方で、一人一日当たり使用量が増加し続けるのは、その妥当性に疑問があると指摘しています。このことから、第 6 条の補助事業等の目的及び内容が適正であるかどうかということと合致しな

いことから、2010年度補助金配分は凍結して検証すべきです。国は昨年12月末の2010年度予算案発表の段階で、当別ダムを本体工事着工済みとして再検証の対象から外しましたが、本体着工といってもまだ完成までに数年あり緊急性のないダムなので一時凍結し見直すことが重要です。

現在、道の財政も逼迫していることを勘案すると、ムダなダムに多額の税金を投入することは道民の理解を得られず、将来に禍根を残します。

私たちは、当別川にコンクリートのダムではなく、昔のように魚が溯上する川を残したいと願っています。

以上の理由から、民主党北海道として当別ダムを一時凍結するよう政策決定してください。さらに、2010年度の予算配分を凍結するよう国へ要請していただきますようお願いいたします。

2. サンプルダムに関する要望書

要旨

1. サンプルダムの必要性はきわめてあいまいです。また北海道開発局が流域住民に対して行ったアンケート結果ではダム希望者がわずか7%でした。サンプルダムの必要性を根本から見直してください。
2. サンプルダム事業の見直しにあたっては、ダム推進とダム中止双方の意見を交わし、民意を十分反映する、第三者機関による検討としてください。

1) サンプルダムの必要性について

1-1) サンプルダム建設の目的の変遷

サンプルダム建設の目的は、地域振興の要望を受けて計画され、その後、様々に変更されたため、目的が定まらなく極めてあいまいです。当初、(1) 過疎化が進んでいく中で危機感を覚えた地元の下川町長は、地域振興のために北海道開発局にダム建設を要望しました。(2) それを受けた北海道開発局は、天塩川中流域の音威子府村の治水のためにサンプルダムを建設するとしたが、その後(3) 目的を天塩川全体の治水に変更し、最終的には(4) 天塩川流域最大の都市、名寄市を水害から守ると目的を変更してきました。このような目的の変遷は、ダム建設それ自体が目的化された問題点を示しております。

1-2) 戦後最大の洪水の実態

治水の目標としている戦後最大の洪水(S48、S50、S56)では、名寄川本流の堤防は決壊せず、支流における堤防決壊があったが、洪水の大部分は内水氾濫であった。その後支流の堤防は整備・強化されたので、残る課題は本流で強化が必要な堤防の整備と内水氾濫を防止するための排水機場の設置であると、私たちは考えている。河川整備計画には、昭和48年8月の十線川における氾濫の写真が掲載されているが、この川は名寄川の支流で

あり、現在では十分な堤防が完備しその後の氾濫が認められず、その上にサンルダムとは関係のない川である。戦後最大の洪水は、多くが支流の氾濫や内水氾濫であるので、サンルダムの必要性には説得力がない。

1-3) 流域住民はダムを望んでいない

北海道開発局が、1998年に流域住民5,000人対象に行ったアンケートでは、天塩川が安全と回答した人は89%、ダムによる治水を望んだ人は7%、流域住民は、河川改修などで天塩川は安全だと考えており、ダムが必要と感じていない。

2) 名寄市の水道水利水の問題

名寄市は、サンルダムから17.5リットル/秒の水道水を取水すると予定しているが、現状でも老朽水道管の漏水（給水量の約20%）対策を行うならば十分であり、名寄市の人口動態予測を考慮すると、近い将来、ダムからの取水はまったく不要になる。また、名寄市が予定しているダムからの取水量は0.0175m³/秒であり、近年最大の濁水流量は3~4m³/秒であるので、名寄市が希望する取水量は濁水流量の0.43~0.58%というきわめてわずかなものであり、名寄川の流量に影響を与えない。現在の国土交通省の考えでは、新たに水道水を利用するにはダムを認めなければならないことになっているが、この考えをやめるならば、名寄川からほんのわずかな取水で十分水道水をまかなえる。

3) サクラマス保全

北海道だけではなくわが国の重要な資源であるサクラマスは、ダムなどの河川環境の悪化で減少しているが、サンル川において日本一のヤマメ密度（尾数/m²）を示している。流域委員会ではサクラマス保全が重要という認識があった。サンルダムのような大型ダムに魚道を作って成功した例はまだない現状の中、流域委員会意見は、試験して検討することを述べていた。しかし、その後設置された魚類専門家会議では開発局の意向どおり、まずダムを建設してから魚道の効果を検証するとした。以上の経過には、まずダムありきで、サクラマスがまったく保全されないことになる。このような状況は、開発局がみずからの意向に合う委員を選任し、運営を行ったためであると私たちは考えている。私たちは、魚道の効果を検証して、その結果に基づきダム建設の是非を検討することが、国民に認められる普通の論理であると考えている。

4) 流域委員会と魚類保全委員会の審議がまったく不十分

流域委員会では、もっとも重要な治水に関する学識経験者として、ダム推進意見の持ち主である河川工学者を委員長（元開発局職員）と委員にしており、委員にダムによらない治水を考える河川工学者が欠けていた。また、ダムによる治水について賛成と反対の両方の立場にある人々を委員とすべきであった。ちなみに、ダムに批判的な意見を述べた学識経験者は動物生態学者であった。さらに、同委員会は、北海道開発局によって運営されたためと思われるが、当初は活発な論議が行われたが、次第にダム賛成派とダム反対派の人しか発言しなくなった。自由な審議によって民意が反映されなければ、将来に禍根を残すダム計画が作られる危険性が高い。

3. 二風谷ダムおよび平取ダムに関する要望書

要旨

1. 二風谷ダムの堆砂問題について、早急に将来の解決方向を検討してください。私たちは、二風谷ダムの撤去による治水対策と沙流川流域本来の自然環境への回復をめざす必要があると考えています。
2. 平取ダムは、治水上の問題点がある上に地質の特徴から二風谷ダムと同様に堆砂が急速に進行すると考えられるので、平取ダム建設を中止し、二風谷ダムの堆砂問題を含めて、沙流川流域のダムによらない治水方策を早急に検討してください。

1) 二風谷ダムの堆砂問題

二風谷ダムは、1997年竣工から11年後の2008年、当初の予測とはまったく異なる速いスピードで生じた堆砂によってダム容量（貯水容量）の41%が失われています。このまま堆砂が進行するならば、二風谷ダムは2022年頃には土砂で埋まってしまうことが懸念されます。北海道開発局は2年前、科学的根拠を示さずに、ダムに流入する土砂量と流出する土砂量が釣り合うようになるので堆砂は進まないと述べておりますが、その後も堆砂は進行しています。二風谷ダムの治水能力は、すでに貯水容量の41%が失われていますので、ダム下流において洪水の危険性が高まるだけでなく、ダム上流においても川床上昇により洪水の危険性が増しています。これは、二風谷ダム裁判で違法とされながらダムを撤去しなかったツケがきた最悪の状況と言えます。そのため、今からでも遅くないので、ダム撤去を含めた根本的な対策の検討が必要と考えます。

二風谷ダムの建設後、ダム下流は泥の川となり、川床低下がもたらす地下水位低下による水道水枯渇問題が発生し、河口は土砂供給が絶たれて浸食が進む悲惨な状態になっています。また、沙流川はかつてアイヌ民族の主な食糧であるサケに加えて、サクラマスやシシャモが豊富でありましたが、今はほとんど何もいない川に変貌しました。従って、二風谷ダムの撤去は、昔の清流を取り戻す可能性を秘めています。

2) 平取ダムの問題点

二風谷ダムの集水域は1,215 km²であり、平取ダムの集水域は234 km²ですので、平取ダムが完成したと仮定すると、二風谷ダムの集水域は平取ダムのそれを除いた981 km²となります。そのような沙流川流域に平均的に雨が降ったと仮定すると、平取ダムは二風谷ダムの23%しか水量を貯留できません。それに対して、河川整備計画における洪水調節容量は、二風谷ダムに1,720 m³/秒、平取ダムに4,380 m³/秒とされており、大きな集水域に少ない洪水調節、小さな集水域ダムに多い洪水調節を期待するという、科学的根拠のない計画となっています。平取ダムは、沙流川流域でも地質学的にもっとも崩落や土砂流出が大きいと予測される額平川流域に計画されています。北海道開発局は、排砂ゲートを作るので土砂は堆積しないと述べていますが、専門家は疑問を述べています。ダムに土砂をためることは、下流に多大な環境破壊を引き起こし、また、開発局が述べているように排砂

が行われるならば、堆積した泥が多量に排出されることになり、いずれにおいても環境破壊は必至です。このような地質を中心とした自然環境を考えると、額平川流域にダムを作るべきではありません。その上で、額平川は、日高山脈の最高峰、幌尻岳を源とする河川として、その流域全体がアイヌ民族にとって大変重要であることを重視すべきです。

北海道脱ダムをめざす会構成団体

(社)北海道自然保護協会 会長 佐藤謙
十勝自然保護協会 会長 安藤御史
北海道自然保護連合 代表 寺島一男
富川北一丁目沙流川被害者の会代表 中村正晴
平取ダム建設問題協議会 松井和男
胆振日高高校退職教職員の会 代表 高橋 守
平取ダム建設で失われる自然を守る会 代表 中村智子
苫小牧の自然を守る会 代表 舘崎やよい
ユウバリコザクラの会 代表 藤井純一
ザ・フォレストレンジャーズ 代表 市川守弘
イテキ・ウエンダム・シサムの会 代表 佐々木義治
自然林再生ネットワーク 代表 前田菜穂子
下川自然を考える会 会長 千葉永二
サンルダム建設を考える集い 代表 渋谷静男
環境ネットワーク旭川地球村 代表 山城えり子
大雪と石狩の自然を守る会 代表 寺島一男
北海道の森と川を語る会代表 小野 有五
旭川・森と川ネット21 代表 平田一三
当別ダム周辺の環境を考える市民連絡会 代表幹事 安藤加代子